

課題2 「主体性等」をどう育てるか?

【図表2】大学の授業形式は変わりつつある  
～大学生の授業形式別の経験率

グループワークなどの協同作業をする授業	2008年	53.3	2012年	59.1	2016年	71.4
プレゼンテーションの機会を取り入れた授業	2008年	51.0	2012年	57.6	2016年	67.0
ディスカッションの機会を取り入れた授業	2008年	46.7	2012年	54.2	2016年	65.7
少人数のゼミ・演習形式の授業	2008年	62.9	2012年	64.7	2016年	61.9
教員と双方向のやりとりがある授業	2008年	46.1	2012年	50.5	2016年	50.8
提出物に教員からのコメントが付されて返却される授業	2008年	40.7	2012年	43.7	2016年	50.5
実験や調査の機会を取り入れた授業	2008年	45.1	2012年	49.6	2016年	49.8
教室外で体験的な活動や実習を行う授業	2008年	32.4	2012年	39.1	2016年	41.1

\*ベネッセ教育総合研究所「第3回大学生の学習・生活実態調査」(2016年)より  
\*2016年度調査において肯定回答率が40%を上回った回答項目を抜粋

【図表3】普遍的な力の育成は大学の役割  
～中教審が示す高等教育の将来像

**大学教育が提供すべきもの**

▶ 急速な社会の変化の中で陳腐化しない普遍的なスキル、リテラシー

- 一般教育・共通教育と専門教育を通じた汎用的能力の育成
- 強みとなる専門分野と幅広い視野を兼ね備えた人材の育成

▶ 第4次産業革命時代の新たなリテラシー

- 数理・データサイエンス

**そのために大学が改革すべきこと**

▶ 変化に迅速かつ柔軟に対応できる教育研究システムの構築

▶ 18歳人口の減少を踏まえた、大学の規模や地域配置の再編

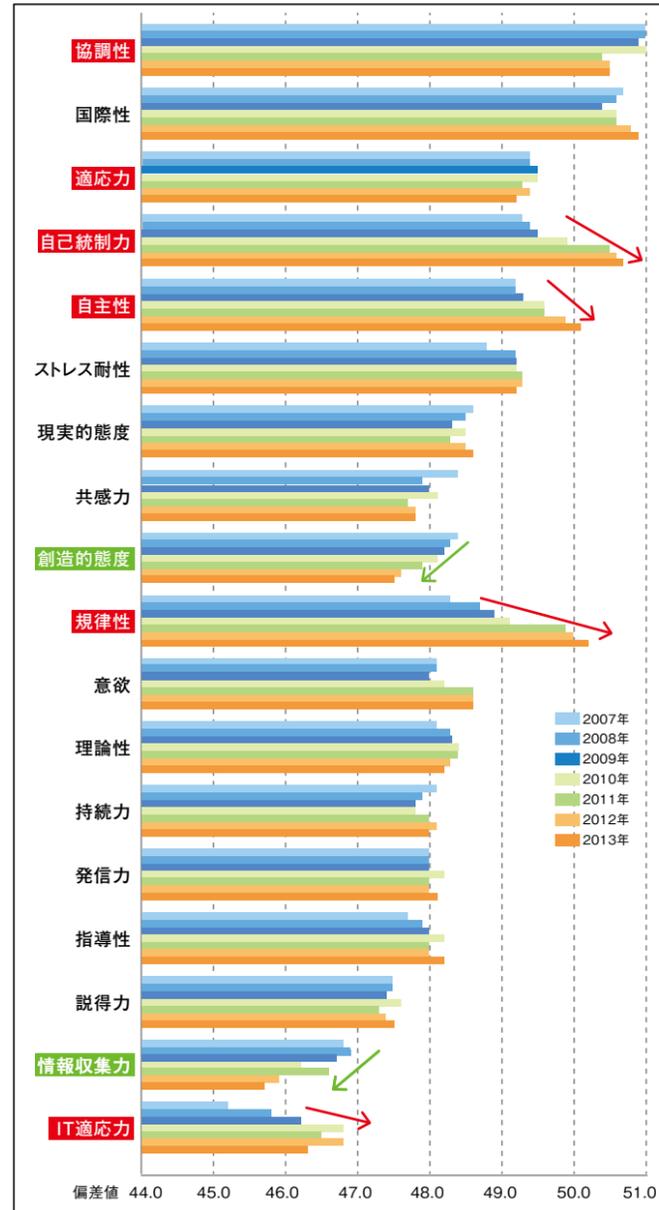
▶ 教育の質の保証と情報公開

- 可視化や公開を検討すべきもの

(学修時間、GPA、退学率、就職率、資格取得、アセスメントテスト、ルーブリック、ポートフォリオ、学生の成長実感、満足度調査 など)

\*中央教育審議会大学分科会将来構想部会  
「今後の高等教育の将来像の提示に向けた論点整理」(2017)を編集部が抜粋・加工

【図表1】年を追うごとに「従順」になる学生  
～大学新入生の強みの変化



\*ベネッセキャリア「自己発見レポート」全国集計データ 2007～2013年の全国平均偏差値の推移をグラフ化

いを視野に入れ、より個人個人に向き合った学生把握を行うことが大切だ。

中央教育審議会では、大学教育の役割として「陳腐化しない普遍的なスキル、リテラシー」の育成が提唱されています【図表3】。これはまさに次期学習指導要領が小中高で育成しようとしている部分ですから、大学教育はその学びを引き継ぎ、発展させるということが求められます。

もし学生の学びの意識・姿勢がそちらに向かず、「従順」なままであるなら、高校までに学んできたこと、この大学を志望した理由や学ぼうとしていることなどを入試で問い、さらに入学前や初年度の段階で丁寧に再確認させることも効果的だと言えるでしょう。

多様化する入学者にきめ細かに対応するためには、学修や行動の履歴を可視化するプラットフォームが求められることとなります。eポートフォリオはその役割を果たす重要なツールとなるでしょう。高校、大学、企業、それぞれが受け入れた人の個々の体験をふまえながら連続的に成長させていけるように、eポートフォリオが共通言語化され、その内容が高大社でスムーズに引き継がれるようになれば理想的です。

今の学生＝「従順なツアー客」!?



10年前から変わらない!? 大学生の受け身な姿勢

今の学生の印象を大学の教職員の方々に伺うと、「非常にまじめだが受け身の姿勢がめだつ」といったお答えが多いように思います。

10年前から変わらない!? 大学生の受け身な姿勢

す。実際に、2007～2013年にかけて社会的な強みとなる項目を大学入学時点で測定した結果によると、めだつて高いのは「協調性」でした【図表1】。「適応力」や「規律性」も高いことから、当時の大学生を「従順なツアー客」と表現したものです。それから10年たった現在も、いまだにこのキーワードが共感を呼ぶとすれば、現在の学生は当時と同じか、より「従順」になっているのかも知れません。測定結果を経年で比較しても、「協調性」は高いまま、「自己統制力」や「規律性」はより高まっているようです。また、「自主性」が高まっているものの、「創造的態度」が年々低下している状況を見ると、「主体性等」だけでなく、それらを発揮して創造的な活動をさせることも重要な

ことでしょう。

学びを実質化させてこそ教育は生きる

「主体性等」を育成する学びの機会として、グループワーク、プレゼンテーション、ディスカッションなどがあります【図表2】を見ると、大学教育の中ではこれらの機会は10年前に比べて格段に増えているようです。

それにもかかわらず、学生に対する実感が依然「従順なツアー客」であるならば、大学の授業が意欲を喚起するものになっていないか、実施後に学生はどんなリフレクションをしているのかなど、それらの学びの機会の実効性を今一度点検する必要があります。

こうした状況をふまえると、教育の質保証や学修成果の可視化

は、「アクティブ・ラーニングの実施率」といった定量的なデータだけでなく、学生がどのような意識で学修経験を積み、そこから何を学んでいるのか(あるいは得られていないのか)まで確認して初めてなされるものであると言えます【図表3】。

学習履歴の多様化に備え個々に向き合う体制を

2024年度には高校において新しい学習指導要領が全面实施となり、大学入学者の学びの履歴が大きく変わります。探究活動や教科横断的知識などが重視されることにより、個々の経験、またその経験をどこまで内実化できているかのレベルが、これまでよりも多様化すると考えられます。したがって、高校までの学習履歴の違

オピニオン

「従順なツアー客である学生の「主体性等」とどう向き合うか?」

データに表れた、イマドキの大学生の学びに向かう姿勢。大学は彼ら、彼女らの「主体性等」を引き出すために何をすべきか、IRの観点から考察する。



(一財)大学IR総研 調査研究部 村山和生

むらやまかずお ● 株式会社ベネッセコーポレーションでの大学入試分析担当などを経て、株式会社ベネッセキャリアにて高等教育全般の調査研究に従事。2017年4月より現職。

課題2 「主体性等」をどう育てるか?